

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点

各教科等における特徴的な指導の実践事例

1. 基本情報

都道府県名及び市町村名

大分県竹田市久住町

学校名

竹田市立久住小学校

学校のURL

<http://syou.oita-ed.jp/taketa/kujyuu/>

2. 学校紹介

学級数

【通常の学級】全学年各1学級【特別支援】1学級【合計】7学級

児童生徒数

【全児童数】76人（平成23年12月1日現在）
（内訳：1年生6人 2年生11人 3年生16人 4年生17人 5年14人 6年生12人）

学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校教育目標】

「心豊かに学び続ける久住っ子の育成～確かな学力と自製の心をもつ子どもの育成～」

【人権教育目標】

「自分の思いや考えを伝え合い、支え合う仲間づくりをめざして」

人権教育にかかる取組の全体概要

< 児童の実態及び課題 >

全体にコミュニケーション力が乏しく、自分の思いや考えをうまく伝えることができない。

そのため、生活の場では、友だちとのトラブルが頻繁に発生し、学習の場においては、伝え合いの深まりに欠ける。

< 取組の概要 >

授業づくり（学習規律、伝え合う意欲を高める課題設定、ワークシート・メモの活用、伝え合う場や方法の工夫）

言語環境づくり（掲示コーナーの工夫、群読集会）

仲間づくり（児童会活動、縦割り班活動、学級集団の傾向を把握するためのアンケートの活用）

家庭・地域との連携（家庭学習、親子の会話、祖父母学級、学習サポーター活用）

< 期待される成果 >

「思いや考えを伝え合う力」をつけることが、自他理解、自尊感情の高揚につながる。

伝え合いを重ねることで、自分の思いや考えが深まり、学力の定着につながる。

以上の力が、人権や差別の問題について、理解を深めたり解決したりする基盤となる。

3. 特色ある実践事例の内容

(取組のねらい、目的)

小、中学校連携のもと、子どもの未来を保障する人権教育の在り方を検討し、児童生徒の自尊感情の高揚・自他理解・学力の保障を図る。

(取組をはじめたきっかけ)

平成21年度に文部科学省「人権教育総合推進地域事業」の指定を受け、近隣の白丹小学校、久住中学校と共同研究に取り組む。(平成23年度まで3年間)

(取組の内容)

1. 話型・聴型の見直しと学習規律づくり

(1) 話型・聴型見直しの意義

- ・ 各学年の系統性を考慮することで「話す・聞く」の目標達成をめざす。
- ・ 様々な場面での「伝え合い」の基礎や発言のモデルをつくることができる。
- ・ 自他を大切にしたい伝え合いの力を高めることができる。

(2) 学習規律づくりの意義

- ・ 学習へのスムーズな取りかかりにより集中力を高める。
- ・ 内容の徹底、定着を図ることができる。

(3) 取組の成果

- ・ 互いの気持ちや考えを言葉で伝え合うことで、自他理解が深まり、主体的に学習する意欲も高まった。

2. 国語科における授業実践

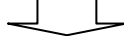
(1) 2年の実践

<単元>

みんなの願いが込められたなかよしたんけん隊の旗をつくらう

<課題>

みんなの願いが込められたマークを考えよう



<伝え合いの場>

ペア グループ 学級全体
保護者へ

<支え合いの方法>

ワークシート・マークの絵

<伝え合いを支えるもの>

- ・ 教師のモデリング
- ・ 「話し名人」のめあて
- ・ 「話し合い名人」のめあて
- ・ 「話し合いすすめ方」シート
- ・ ホワイトボードの活用

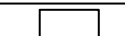
(2) 3年の実践

<単元>

わたしたちの大切なめだか
～説明文「めだか」を読もう～

<課題>

めだかの身の守り方が、全校のみんなに伝わるように、吹き出しに合う言葉を考えよう



<伝え合いの場>

エキスパート班 ジグソー班
学級全体 放送集会(全校)

<支え合いの方法>

ワークシート・付せん
ペープサート(全校集会)

<伝え合いを支えるもの>

- ・ 「話し合いすすめ方」シート
- ・ ワークシートと一体化した板書

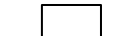
(3) 4年の実践

<単元>

おすすめの本を紹介しよう

<課題>

自分がすすめる理由をわかりやすく伝えよう



<伝え合いの場>

ペア 学級全体

<支え合いの方法>

ワークシート(自分の工夫)

<支え合いを支えるもの>

- ・ 各自の工夫(挿絵、実物の掲示、クイズ、手品)
- ・ 発表の手順を提示
- ・ 話型を意識させる

3．言語環境づくりと群読集会

(1) ねらい

季節感やリズム感のある詩などを特設コーナーに定期的に掲示することにより言葉を通して感性を高める。言語に慣れ親しみ、言葉の重みや大切さを感じる子どもを育てる。また、群読集会で声を出し、読む楽しさや面白さを味わうことで、発声のスキルを身につけ、仲間意識を育てる。

(2) 成果

校内4つのコーナーに掲示された詩を見たり読んだりすることで、様々な言葉や表現にふれ、心情に働きかけ感性を醸成するきっかけとなった。また、月1回の群読集会を重ねることで、内容理解やリズム感を養い「みんなで読んだら感情がこもって楽しい」「全校で読むので、学年に関係なく仲良くできる」など、仲間づくりを促進させている。

4．児童会活動と縦割り班活動

(1) ねらい

長縄とび等の集会活動や給食時間を通して、励まし合い、よさを認め合うことで、責任感やマナーを習得し、協力して課題を解決していこうとする態度を育てる。

(2) 成果

人権集会やあいさつ運動を児童の全員参加で取り組むことにより、生活上の課題を一人一人が受けとめ、特に高学年児童の主体性が高まった。また、縦割り班活動に取り組むことで、伝え合いやよさ認め姿が日常的に見て取れるようになった。

5．「家庭学習の約束」と「親子の会話を深める」取組

(1) ねらい

家庭と学校が連携することで、学習意欲を高め内容を定着させる。また、保護者との協力により、親子で会話する時間を増やしあたたかい関係をつくる。

(2) 成果

多くの家庭が「約束」を意識して取り組んだ結果、児童に望ましい学習習慣が身についてきた。また、親子の会話によって「学校の様子がよく分かる」「子どもの話を聞くと家族が笑顔になる」との感想がたくさん出てきた。

6．地域との連携

(1) ねらい

祖父母学級やゲストティーチャーを招いた授業により、地域のよさを知り、人とふれあうことで、久住を愛する気持ちを育てる。

(2) 成果

祖父母学級で「子どもや学校の様子がよくわかった」「孫たちと十分ふれ合えて楽しかった」などの声が寄せられ、あたたかい関係づくりができた。また、ゲストティーチャーからの様々な支援により、児童は学習を深め、久住のすばらしさを知るきっかけとなった。

(取組の主体や実施体制)

校内の研究組織を「授業づくり」「言語環境づくり」「仲間づくり」「家庭・地域連携」の4つとして、各グループに分かれて研究を推進する。

(課題及び講じた工夫)～国語科の授業実践を通して～

「伝え合い」をより深め広げるために学習過程及び学習形態を共通化した。
学習課題をより明確にする表現、教具（ワークシート等）を工夫した。
ふり返しカードの利用により自己評価を徹底させ、学習意欲の向上をめざした。

4. 実践事例の実績、実施による効果

（効果を上げた事例）

国語科の教材と総合的な学習の時間、生活科での体験活動を関連づけることで、児童の学習意欲を高めた。

伝え合いの場を、全校集会や保護者参観日に設定することで、最後まで児童の目的意識が持続した。練習段階からペアトークを取り入れ自信をつけさせた。

「協調学習」(エキスパート班・ジグソー班)を導入することで、伝え合いの課題が明確になり、個々のスキルアップにつながった。

（得られた知見・改善を図った事項）

- ・ 特に低学年では、課題をスモールステップ化したり、理解しやすい言葉に置き換えたりする工夫が必要である。
- ・ 板書とワークシート、ノート、メモとを一体化させることで課題が明確になり思考も深まる。
- ・ 「話し合い進め方シート」を活用することで発表への意欲を高めることができ、伝え合うスキルアップにもつながる。

5. 実践事例についての評価

（取組についての評価及び理由）

「言語環境づくり」「仲間づくり」「家庭・地域との連携」の取組により、久住小学校が教育キャッチフレーズとしてめざす「自分大好き・友だち大好き・学校大好き・久住大好き」な子どもの姿に近づいてきている。

- ・ 月1回の群読集会在が、学年をこえた仲間づくりにつながっている。
- ・ あいさつ運動等の全員参加の取組が、児童の主体性を高めたり、互いのよさ認めたりすることにつながっている。
- ・ 保護者との連携により、学校と家庭とのあたたかい関係づくりができた。ゲストティーチャーの様々な支援が児童の学習を深め、久住のすばらしさを知るきっかけとなっている。

（保護者や地域住民の反応）

家庭、地域との連携による取組を継続させることで、望ましい学習習慣が身につき、親子の会話も増えてきた。保護者等から、「子どもの話を聞くことで家族みんなが笑顔になる」「孫たちといっばいふれ合えてとても楽しかった」という感想が学校に多数寄せられている。

（課題と感じていること）

「自分大好き・友だち大好き・学校大好き・久住大好き」な子どもの姿を願い、総合的な学習の時間を中心に学年に応じたテーマを設定、実践することで、伝え合いのスキルアップを図ってきたが、依然として日常的なトラブルは後を絶たない。教員が互いの実践を伝え合い共有することによって、児童の自他理解や自尊感情、豊かな心の育成をめざさなければならないと考える。今後もあらゆる機会をとらえて、すべての教職員による取組を継続することが必要である。

【 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント 】

竹田市立久住小学校

人権教育が育成を目指す能力や技能として、考えや気持ちを適切かつ豊かに表現し、また、的確に理解できるような、伝え合い、分かり合うためのコミュニケーションの能力やそのための技能があげられる。本事例は、各教科等の授業において、こうしたコミュニケーション能力等を向上させるため、児童の伝え合う意欲を高める課題を設定し、「ワークシート・メモ」を活用させながら、伝え合う場や方法を工夫した授業づくりを中心とする取組である。特に、国語科における授業実践では、「課題設定」から「伝え合いの場」「支え合いの方法」「伝え合いを支えるもの」において、児童の発達の段階を踏まえた工夫が施されている。学校全体で各教科等において行われるこのような実践により、児童の人権意識や人権感覚の育成につながっている。